

中臣十三塚

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



第70次調査の古墳

なかとみ
中臣十三塚の名称の由来について伝える資料は、現在のところ知られていない。中世のころ、全国的に十三仏思想という信仰が流行したという。これは十三の塚や石仏などを対象とした信仰であり、現在も全国に数多くの「十三塚」の名称が残るようである。案外、中臣十三塚もこの頃に信仰の対象とされて、「十三塚」と呼ばれるようになったのかも知れない。

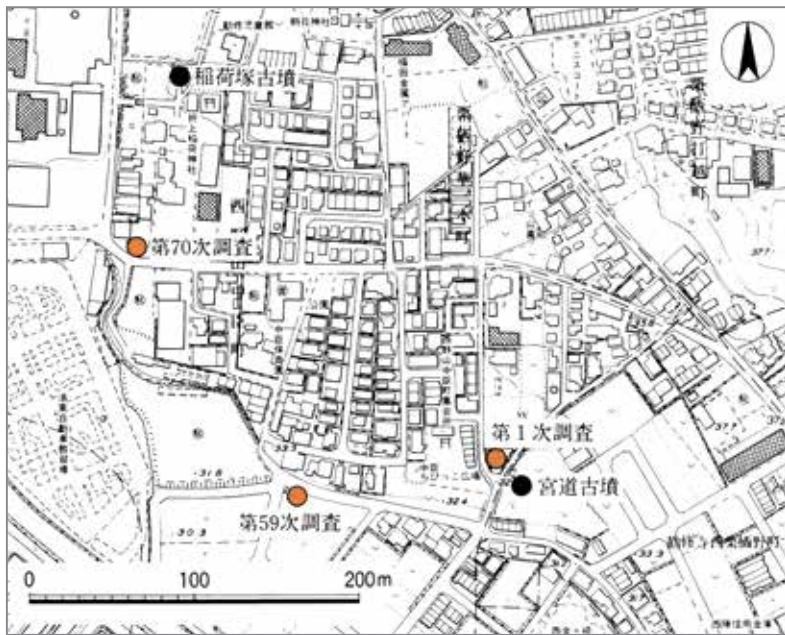
ところが、中臣十三塚は正式には中臣十三塚古墳群と呼ばれ、中

臣遺跡が広がる山科区栗栖野丘陵くるすのに所在した古墳時代後期の群集墳であったことがわかっている。現在では宅地造成などにより消滅し、みやじ宮道古墳と稲荷塚古墳の2基を残すのみとなっている。十三塚と呼ばれるものの、何基の古墳で構成されていたか不明である。中臣遺跡では、1971年より70次にわたる発掘・試掘調査を実施して、すでに消滅・半壊してしまった古墳の跡も3基発見した。つまり、中臣十三塚古墳群のうちの5基につ

いては、その存在が確認できているのである。

宮道古墳は、現在竹林となっているが、墳丘と周溝がよくわかる状態で保存されている。径約26m・高さ約3.6mの円墳である。醍醐天皇の祖母である宮道烈子の墓であると伝えられ、後小野墓と呼ばれている。

稲荷塚古墳は、折上神社境内におりがみ稲荷社を祠る塚として整備保存されている。径約18m・高さ約3mの円墳である。



中臣十三塚古墳分布図



第59次調査の古墳

宮道古墳のすぐ西で行なった第1次調査では、東西0.8～0.9 m・南北2.5 mの石室の基底部分と、これを中心として径約7 mの円形に巡る周溝を発見した。

宮道古墳の西約100 mの地点で行なった第59次調査では、石室に使われた石材の抜き取り痕と径13～14 mの円形に巡る周溝を発見した。石室は、抜き取り痕から復元すると両袖式の横穴式石室で、規模は玄室幅1.4 m・長さ2.7 m、羨道幅0.9 m・長さ2.4 mである。

また、稲荷塚古墳の南約100 mのところには、以前から石材が露出する小さな高まりがあることが知られていた。第70次調査の結果、片袖式の横穴式石室をもつ古墳であることがわかったが、墳丘は大幅に削平されており、規模・形態などは不明である。石室はほとんどの石材が抜取られていたが、基底部分の石材と東側壁の一部は2段目の石材が原位置を保っていた。規模は玄室幅1.7 m・長さ3.4 m、羨道幅1.0 m・長さは3 m以上。

石室の床面には5～10 cm程度の小礫を敷き詰めていた。

これらの古墳が造られた年代は、採集及び出土土器から、宮道古墳と稲荷塚古墳が6世紀後半、発掘調査を行なった3つの古墳が7世紀初頭と考えられる。

また、かつて付近の民家の庭に径7～8 m・高さ1.5 m程度の高まりがあり、須恵器の破片を採集したとの報告がある。現在では定かではないが、この高まりが古墳であったとすれば、須恵器からみて6世紀中頃に築造されたものであろう。

今後、中臣遺跡の発掘調査において、さらに古墳の痕跡が発見される可能性はあるが、これまでの成果より、中臣十三塚は6世紀中頃から7世紀初頭にかけて造られた古墳群であったといえる。

中臣遺跡は、縄文時代中期以降連綿と続いた集落遺跡である。6～7世紀の竪穴住居跡なども多く発見されていることから、古墳時代後期にも大集落が形成されていたことがわかっている。中臣十三塚古墳群は、当時、中臣の集落で生活を営んだ人々が造ったのであろう。また、古墳時代後期には山科盆地周辺の山裾で須恵器の窯が操業され、製鉄も行なわれていたことがわかっている。このことから、かなり有力な豪族が山科一帯を根拠地としていたことがわかる。

中臣遺跡は、従来から、古代豪族・中臣氏との関連が指摘されている。中臣十三塚に葬られた人々も中臣氏にゆかりのある人物であったかもしれない。